

その日の朝早く彼がイスに座って惣菜パンを食べていると、机の上で携帯が震えた。「はい、もしもし藤田新です」

やや調子はずれに甲高い、だが二六歳の若者らしいはつらつとした声が送話口に向かっている。

受話口から漏れる男の声は音質の悪いガラケーを耳から離しても聞きとれるほど隅々までくつきり響いている。実際に新はその大きな耳朶から携帯を遠ざけて相手の話をひとり聞き終えると、

「はい承知しました、心から喜んで」

注文を受けた居酒屋店員のようなセリフがやはり接客風の威勢のよさで間髪入れず彼の口から飛び出した。嬉々とした様子がそのギョロリとした目、肉付きのよい鮫肌の頬から溢れている。

仏像のように静止した笑みで携帯を握ったままの新は次の声を待っている。受話口からは何も聞こえてこない。

「おや？」

口に出しているという携帯を耳にギョツと押し当てた。

やがて通話が終了したことを知らせる機械音が流れてきたので切る、のボタンを押した。つかのまその顔に浮かぬ表情が浮かんだがすぐに消え、短く刈った坊主頭をサツとひと撫ですると、

「さあ、こうしてはいられないぞ」

これもはつきり声に出しているという、イスの背にすっぽり埋まっていた小さな躰を反転させ短い脚で床の上に立った。独り言が多いのは一人暮らしが長いせいかもしれない。

新の足が向かった先は玄関のほう、トイレと風呂場の間の空きスペースに置かれた洗濯機の前だ。フタを開けてのぞき込むと、堆積した衣類の中から黒いポロシャツとカーキ色のチノパンを摘み出した。これらは一見私服にみえるが、よく見るとさる高級ホテルのロゴが胸とベルト通しの下に刺繍されていた。新がほぼ毎日のようにベッドメイクのバイトに通うホテルである。従業員用の脱衣カゴに入れておけばクリーニングしてくれるのだが、クリーニング屋でもバイト経験のある新は自分で洗濯しプレスするのをよしとしている。それに週に六日は入っているから、二着しかない自分専用のユニフォームはホテルのクリーニングでは間に合わないのだ。綺麗好きの新は毎日新しいものでないと袖を通す気にならない。そこでほぼ毎朝、時にはユニフォームだけ入った洗濯機を回すことになる。

今もう一着のユニフォームも洗濯槽の中に埋もれている。なぜ今日に限って二着とも未洗濯かといえれば昨日の天気は雨だった上今日はバイト休みなので、まとめて今朝洗えばいいと思ったからだ。

それなのに今、ユニフォームを手に台所にもどった新はフスマを開け、さっきまでそこに寝ていた薄暗い部屋に入った。壁際に立てかけたアイロン台を下ろしアイロンを握って再び台所にもどると取っ手のフタを開けスチーム用の水を注ぎ、コードをコンセントに差し込んだのはなぜなのか？

恐らくは、これもよくあることだが、さっきの電話は急に欠員が出たから今から入ってくれないかというバイト主任からの依頼だったにちがいない。

二分もするうちチリチリとアイロンの過熱する音がひっそりした暗がり立ち込めた。それと同時に、まるで部屋中に置かれた無数のアイロンがいつせいに熱を帯びていくような物音と気配が騒ぎはじめた。

「おいおい、そう急かさないでくれよ。忘れたわけじゃないんだから」

部屋の片隅に向かつて新はいうと近づいていった。その辺りに灰白く浮かぶ大きなカゴの中でハムスターたちが早朝だというのにゲージ内のスロープを上り下りしたり滑車を回したり、どれも忙しなく活動している。飼い始めた当初は二匹だったのが最近立て続けに子が産まれ六匹になったのが活性化の原因かもしれない。

どれも丸々と太って矮小なアライグマのようである。本来ならハムスターの場合夜一回だけの餌やりでいいのに、毎朝空っぽになった餌箱をみるとちようど今からそうしようとしているみたいに、掌が入るぎりぎりの幅に金網を開き、ひと握りのペレットを投入してしまふのだ。

「今日は帰りが遅くなるからな、計画的に食べるんだぞ。何事も計画・実行・反省、その繰り返し……」

いいながら首を垂れ、自分の腰回りを見下ろす恰好になった。ペットは飼い主に似る、そんな耳慣れた言い回しが脳裏をよぎったのかもしれない。

実際にへその辺りを撫で回している。最近の若者には珍しいグンゼの白い長袖の肌着は首から胸にかけてはゆったりしているのに、下がっていくにつれぴったり肌に貼り付いていた。

その肌着がだんだんとまばゆい白さに変化していく。日の出の時刻だ。

窓辺に寄った新はカーテンをサッと開けた。折から射し込んだ朝日に照らし出されたその顔に自然な笑みがこみ上げた。腕を広げ伸びをする姿は往年の小学生向け雑誌の表紙を飾る、小五か小六の肥満児にしか見えなかった。

クリーニングから返ってきたシーツやベッドカバーや部屋着を収納していたら十一時になったので、遅番のバイトにあとを託して藤田新はリネン室を出た。エレベーターでB2から1階に上がり、事務室のドアノブをひねるとさっきまでいっしょだったフィリップ人の若い男女が入れ違いに出てきた。

勤務時間中の無愛想な様子とは打って変わって二人とも本来のラテン気質をとりもどし、「じゃあね、See you tomorrow!」

新の肩を叩くと、手をつないで更衣室へつづくスロープを下りていった。中に入ると、

「お疲れさまです！」

元気な声でいい、タイムカードを押す。

背後のデスクでメンテナンス・マネジャーと部下二人が一瞬黙り、すぐにまたさっきまでの低く重い声音による話をつづけた。

新は小机の上のバインダーを開きシフト表の明日分のマス目にチェック済の印を付けた。後ろに挟んだクリアファイルから来月分のシフト希望表を抜き出し、すべての日付の「早番」「残業可」欄に○をした。

『よし、これで完璧』

心の中でそう呟いたつもりが実際に肉声となって洩れ出てしまったらしい。背後の三人から忍び笑いが起きた。

それには気がつかなかったのか、引き続きノリのいい音楽に合わせるかのように手足で軽快なリズムを刻みながらバインダーをボタンと閉じて棚にもどし、壁の上にズラッと貼られたプリントに新しいものはないかと眺めた。

『新メニュー試食会のお知らせ』に目が留まり、これも極く微かな声で音読していったが、途中から昨日も読んだのを思い出してやめた。次は『今月の目標』の一行目から指で文字を追いつつ確認していく。朝礼の時いつ抜き打ちで暗唱させられるかわからず、メモを取ることも許されていないから必死だ。まず大丈夫そう。

『よし』

大きくうなずくと、

「ではお先に失礼します！」

深々とおじぎしながらドアノブに手を掛けた。

「よお社長、今日も絶好調じゃない。まあこっちに来いよ」

ミーティングは小休止らしい。マネジャーはソファアに浅く掛け直し、紙コップを持ち上げながら言った。若い二人の社員は肩で息を吐き、腕や肩を回している。

「今日はちよっと急ぎますので」

ドアを細く開けながら新は言った。

「デートかい？ 羨ましいよなあ。俺なんか昨日からここに泊まりだよ、君らがよく働いてくれるんで俺らはもつと頑張らなくちゃな、そうだろ？」

部下二人を見回していった。若い男のほうは白い繊細なうなじを縮めながら下を向いて笑った。もう一人の若い女は後ろでできつく結んだ髪をなでながら硬い横顔でレジュメの束に向き合っている。

「なあ、一日でいいから俺と交代しない？ ほら、これ着てさあ」

銀色のバッジが胸に付いたジャケットを脱ごうとする仕草でマネジャーは言った。眼鏡のフレームの下半分が埋まった頬の分厚い肉は引きつっている。三十代前半だということにもみあげはほぼ真っ白だ。

今度は残る二人も声を出して笑った。

新はまるで外国語でも聞いているみたいに「ん？」という顔をしたあと、

「ではまた明日」

もう一度おじぎすると、新を注視する六つの目から冷たく湿った空気が流れはじめたその部屋をあとにした。

十一時を過ぎてもなお高島朱美の迷いは募るばかりだった。待ち合わせの時刻はとつくに過ぎていく。行くべきか、行かざるべきか。そう決めあぐねているのは何も緊張を強いられるかしこまった場所ではなく、ユニバーサル・スタジオ・ジャパン、通称USJ又はユニバである。待ち合わせたのは気の置けない高校以来の友人カップルである。にもかかわらず、いや、であるからこそそこには例えば知り合ったばかりの男から二人きりでと誘われた時（そんなことはいまだかつてなかったが）とは比にならぬほど心の糸はもつれていた。萌々香からまたメールが来た。

「どうなった？ もう一つ乗ったよ」

夏場も出しゃ放しの家具調炬燵に寝転んだまま、返事の文面に頭を悩ます。文字を打ち込んで消すを繰り返すうち、ふと指は萌々香のプロフィール写真の小さな円をタップしている。画像は拡大され、加工処理とはいえ読者モデル然とした萌々香の小顔と高校の先輩の清潔な笑顔がハートマークに囲まれている。

反射的に×印を押して消す。ひとりで指先はあわただしい動きで文字盤を叩いている。「ごめんね、彼氏が用事で遅れてる。またメールする！」

用事って何？ そもそも彼氏はどこの誰なの？ 朱美は自身に問いかける。

とはいえ見栄世間体からねつ造した架空の存在でも恋愛系のゲームやアニメ好きが嵩じた果ての妄想の産物でも決してない。れつきとした名前をもつ人物、「純希」というその名をギョツと胸に抱きしめるとまたもや崩折れてしまいそうな身心を立て直した。

純希とは趣味のゲームにまつわるチャットサイトで知り合った。好きなゲームソフトやキャラクターがびったり一致したことはいつしかグループを抜け出し、一対一のラインのやりとりが始まった。

純希は自撮り写真をメール送信し、朱美にも送ってほしいと書いてきた。眼差しにどこか冷たさはあるものの、繊細さと荒々しさが絶妙にブレンドされた純希の顔をみて朱美は天にも昇る思いだった。が数秒後、闇に投げ出された。

二十八年間デートはおろか文化祭最終日のフォークダンス以外男の手に触れたことさえない自分。家中にたった一つしかない小さな手鏡をのぞいてみる。幼少の頃は母が、今は毎月自分で切る輪郭のくつきりし過ぎたおかつぱ頭。小学校でよくいわれたのは美術の教科

書に載っている岸田劉生の「麗子像」。中二から近視がすすみ分厚い黒縁メガネをかけてからは「ひみつのアッコちゃん」に出てくるアッコちゃんを毎回いじめる意地悪な子。太く短い直線だけでできた体型も酷似している。似ているのは顔と声だけだったのが、異性との没交渉が蓄積するうち性格までそっくりなぞりはじめてしまったと自分でも時々思う。

純希と自分とはジャンルのかけ離れた二冊のマンガ、繊細なタッチの少女漫画と粗い筆遣いのギャグ漫画のようなもの、同じ一つのコマに収まるはずがない。

それでも朱美は百円ショップで化粧品をひと通り買い揃え、この前いつしか定かでないメイクをスマホサイトの助けを借りて施した。

自撮りした写真を目を大きく色を白く加工しウサギの耳と鼻をカラージュすると、どの誰でもない膨張したバービー人形のような面相が出来上がった。

朱美は深く落胆したが、意を決して返信ボタンを押した。どうか一日でも長くこのままの状態が続きますようにと電波めがけて念じながら。

すぐに返事が来た。文面を見て目を疑った。

「エー！ ちょっと待って、可愛いじゃん！」

それからはトントン拍子でメールの文面は恋愛の様相を深め、ラインの無料通話で互いの肉声を聞くといつしか「朱美」「純希」と呼び合い、正式に彼氏彼女として付き合うことになった。当時バイトしていたアウトレット倉庫の従業員一同に朱美が限なく吹聴したの言うまでもない。

純希は三個上の三二歳、父親が役員を務める財閥系大手商社の営業マンだった。日本人のほとんどが知る社名だが、あいにく朱美は知らなかった。

一回目のデートの日程が決まった。朱美は生まれてはじめてファッションモールへ行き、ショップ店員に薦められるままブラウス、スカート、ハイヒールを買った。化粧品はすべて資生堂で買い揃えた。

デートの前夜、朱美が眠れぬまま布団の上で膝を抱えているとスマホが震えた。画面上方に純希の名が浮かぶ。

『ゴメン、行けなくなつた』

急に香港への出張が決まったという。朱美はがっしりした肩を悄然と落としながらも、海外で活躍する彼氏、その彼女である自分に胸を張った。

『いつでも会えるよ！ お仕事頑張ってね♡』

二回目も三回目も突然の海外出張でデートはキャンセルになった。

それでも朝晩のメールは欠かさなかったし、誕生日にはプレゼントも届いた。ある日の昼休みスマホをのぞくと純希からの着信履歴が一件あった。掛け直してもつながらず、『何かあった？』メールを送るとその日の夜長文の返信があった。

上司に勧められて始めた為替オプション取引で毎月そこそこの利益を上げていたのが米国による突然の金融政策の転換で大きな損失を出してしまった。もちろん朱美には一文字も理解できなかったが、うなずきながら文字を目で追った。

実は純希の毎月の給与は父親に管理されており、そこから貰える小遣いは月三万円、今までデートを泣く泣くキャンセルしていたのも金銭事情によるものだった。来年にと二人で予定していた北海道旅行にはどうしても行きたいから始めた相場なのに……月末までに四十八万円貸して……くれないよな。

朱美は涙ぐんでいた。瞼をこするとスマホの液晶を叩き、文字は打たずにハローキティが「OK!」の文字を掲げるスタンプを送った。

あれから二か月、メールを送っても既読スルー、今では未読のまま朱美の送信だけが降り積もっている。電話してもつながらず、一度だけ『海外を忙しく飛び回ってる(笑)』とメールが来た。

ところで今日のUSJはどうすればいい？

カップルと三人で行く遊園地の辛さは身に沁みている。じゃあ一体誰と？ 行くことは伝えてしまったからとりあえず着替えることにする。服装はすっかり元の木阿弥、寝巻き用

のグレーのトレーナーからそれとそっくりなブルーのトレーナーへ。どちらも五〇〇円のワゴンセールで買ったから当然である。

誰でもいい、彼氏になりすませる年恰好の男。考えたら小腹が空いたので冷蔵庫を開けた。賞味期限を一日過ぎたジャンボどら焼きを食べていると、ぼんやり一人の男の姿が浮かんで来た。

とある私鉄沿線の区間快速と準急が止まる比較的大きな駅の前、午前十二時。タクシーが五台と路線バスが三台停まるロータリーの片隅にポツンと一体のブロンズ像が立っている。像は今まさに駆け出そうと前のめりに爪先立った一組の少年少女、明るく空を見上げ見開いた少女の視線の先、まっすぐ伸ばした人差し指から一羽の鳩が飛び立とうとしている。

そんな銅像と競い合うかのようにこの駅前に連日立ち尽くす人影がある。時刻は今日のように正午近くの日もあれば夕暮れ時のこともある。幸い今日は好天に恵まれたが、雷雨や酷暑など悪天候にもかかわらず駅前風景の一面に融け込んでからまもなく一年になる。

体操着のようにシンプルな白のTシャツ、作業着のように濃いブルーで太腿にポケットの付いたズボン、短軀には大き過ぎるで強制労働を想わせる背中の黒いリュック。ロータリーの曲線をなぞるように設置された歩道橋の向こうにそびえ立つ外資系ホテル、その裏手にある従業員通用口から小一時間前に出てきた藤田新の姿である。

さつきから新はガードレールの端に腰かけ、地面まで届かない白いスニーカーをブラブラさせながら、目の前の舗道を駅の階段へと吸い込まれ吐き出される人の波をながめている。うっとりした表情が顔全体にうかび、高い声で何か軽快なリズムを口ずさんでいる。時々歌が止み、コーラス間のセリフみたいにポツリとつぶやく。

「きれいだな」

よく聞くとそう言っている。

駅周辺には短大や看護・美容・デザイン等各種専門学校が点在しているため、この時刻ラッシュタイムへ赴く若い女性の姿が多くみられた。また駅ビルは有名百貨店と一体化し、付近にも大型スーパーや大型衣料品店、脇道に入れば瀟洒なレストランやカフェ、和食料理屋が佇んでいるため中高年の女性も決して少なくなかった。つまり新が眺める人の群れはほとんどが女だった。

自らの歌声に合わせスイングしていた新の短軀がこの日初めて所定の位置を離れた。ゆったりした摺り足でロータリーを横切っていく。通りすがりの一人の女――着古した黒のスーツに白のシャツ、フレッシュ感のないリクルートスーツのようなものを着た若い女にスーツと近づいてゆく。新が何か言葉をかけたがそれにはまるで気がつかないように、女は歩調を緩めることなくまっすぐ前を向きぐんぐん力強く歩いてゆく。

そのうち新の脚が止まり離れていく女の背中に向けて大きく手を振るともとの定位置に座り直した。しばらくするとまたさりげなく歩き出し、今度は三十代後半と思しき重厚な体格を革の上下で包んだ水商売風の女に吸い寄せられてゆく。女の顔を見上げ迷子のようなあてどない様子で新は何か声をかける。女はハッと立ち止まりしげしげと新の全身を見定めると、濃い化粧が剥がれ落ちそうなくらい顔を歪めた。茶色いロングヘアをなびかせるや、持っていたバッグで新の胸をドンと突くと悠々と髪を指で梳かしつつ行ってしまった。新はまた手を振って見送った。

次はママチャリを押して歩く髪に白いものが混じりはじめたジャージ姿の女性。新は反対側から自転車を支え、手伝うしぐさで話しかけた。化粧気のない実直そうな女の顔に一瞬チラツとなまめかしい表情が浮かび、弾けるような笑い声がこぼれた唇を手で押さえるとサドルにまたがり駐輪場のスロープを滑り降りていった。

『調子が出ないな今日は……でもまだまだこれから』

ふたたび新は指定席にもどり、リュックを背中から下ろした。サイドポケットから小さなリングノートを取り出し、付属の細い鉛筆を握った。頁を開くと日付の下に①②③……と数字が振られ、「低い声、顔色悪い、冗談が好き」「汗かき、怒りっぽい、ピュアな感じ」な

どおおまかな女性たちの印象がびっしり書き込まれている。

今日の日付を書くとき宙を見上げ、さつきまでの三人のイメージを思い浮かべ、筆写すると末尾に三つの×を付けた。それぞれの行の右端にはほとんど×が付けられている。ごくたまに○があり、何度もなぞったのかその部分だけ紙面が○型に陥没している。頁を繰り昨日までの数少ない○を振り返った。

そのなかの一つ、およそひと月半前に印された○に目を留めた。「黒メガネ、身長は僕と同じ、昔からよく知る感じ」とのコメントを読み、緩やかにこみ上げてくる歓びに全身を浸した。

今日もきつといるにちがいない。ほとんど毎日あそこでボーっと座り込んでいるのだから。いつたい私はあの時どうしてしまったんだろう、あんな男の話に乗るなんて。といってもコンビニのイトインコーナーでいっしょに紅茶を飲んだだけだ。

そんな声なき独白を蒸気機関車のごとく目・鼻・耳・口から吐き出しながら高島朱美が歩道橋を渡っていると、風に乗って微かな歌声のようなものが耳に届いた。遠い山びこのように甲高い響きを伝える、さりとてそんな透明感はなくザラザラした後味が残る声には聞きおぼえがある。間違いない。イライラと内面に鳥肌が立つのを抑えきれず、それなのに足が速まる自分にまた苛立ちがつのる。

階段を駆け下り、だんだん大きくなっていく歌声を追って人の行き交う駅前の広場を辿ると、「アレ？」募金箱を首から提げた婦人や『知っていますか？ほんとうの神さまのこと』パネルを胸に抱えた背広姿の中年男に混じって歌声の主、Gジャンにジーンズ姿のひょろとした若者が声を張り上げていた。

あの男じゃなかった！ちょうど曲が終わり、最後にギターをかき鳴らしその余韻に自ら目を閉じて聞き入る若者を冷ややかににらみつけながら『さあ、どうしよう？』朱美は突発的なパニック状態に陥った。

そのときロータリーに停まった献血車両の陰から一人の小男が飛び出してきた。かなり肌寒いの白いTシャツ一枚、坊主頭にサルの絵柄が付いた大きなリュック、朱美が探していた男だった。

拍手しながら駆け寄ってきた新はロータリーと広場の境のガードレールをまたぎ、歌っていた男に近づいた。握手を求めると「ブラボー！」口走りつつもう片手をズボンのポケットに突っ込んだ。男の立つ舗道の前に開いたまま置いたギターケースにしゃがみ込み、その中に百円玉をそっと置いた。

ストリートミュージシャンの男は眉まで垂れた前髪をかき上げ、表情のない目をケースに走らせると、「投げ銭は要りません。CDを買って下さい」

ケースの片隅に積まれた手製のCDを顎で指していった。一番上に『一枚千円』の貼り紙がしてある。

新はその下から一枚抜き取り、検品するように何度も裏返してじっくり眺めた。リュックを下ろしチャックを開けて中からサイフを出しかけたが、何かを思い出したようにハッと手を止め、じっと考え込む様子になった。

「ねえ、あんた」
声をかけた朱美の顔を二人の男が同時に見た。

歌唄いは唇を指でひと拭いすると、すぐに視線を逸らした。どうやら朱美があわてて引いた口紅が唇から大きくはみ出しているのを指摘したかったのか、それとも単に気に入らなかつたらしい。

ぼんやり朱美を見上げていた新の顔にパッと灯りが射した。
「やあ彼女、元気？ 今日もきれいだね」

二か月前のことを想い出しているのか、とろけるような光に新の瞳は包まれている。
この場所で声をかけ、最初は太く短い腕に押し返されたが、コーヒー一杯だけという条件

で渋々ながらコンビニへ。スイーツコーナーで買ったケーキを食べ、新は紙コップのコーヒ―を朱美は午後の紅茶を飲んだ。飼っているハムスターの話を延々としたのを憶えているが、彼女が何を話したのか記憶にない。ほとんど何も、相槌さえ打っていないから当然である。帰りがけ夕食用の弁当とサラダチキンを買ってあげたことも思い出しているのか。

ギターの調弦を始めた歌唄いをよそに朱美は、「CD買ってあげるから、いっしょにUSJ行ってくれない？」

単刀直入に切り出した。

新の顔に希望と投げやり、決意とためらいなど相反する表情がめまぐるしい速さでかわるがわる訪れた。ひとりの人間の顔がまるで高速カメラで捉えたみたいに瞬く間にこれほど多種多様に変化することも稀だ。

「うれしいな、でも……」

新は地面の敷石に問いかけるように見つめた。

「お金なら大丈夫、年間パスもあるし」

重心の低い朱美の体軀が見た目以上の安定感に映えた瞬間である。

それでも俯いていた新だが、やがてきつぱり顔を上げると、

「そうではなく、今日はどうしても外せない用事があるので。誘ってくれてありがとう。次は必ず行くからね」

長年の迷いが吹っ切れたかのように晴れやかな様子で朱美に告げた。

朱美の顔がみるみる青ざめ、次にたちまち赤くなるとチツと舌打ちし、

「次はないんだよ」

吐き捨てるような猛烈な勢いで腕を振り振り駆けのほうへ消えていった。

あいかわらずすがすがしい、だかどこか寂しげな笑顔でそれを見送っていた新は、「ねえ、何か聞かせてよ」

調弦を終えギターにハーモニカを取り付けていた傍らの男に言った。

その声を聞いてか聞かずに、男はおもむろにブラード調の前奏を弾きはじめた。

これまでの四六年間のなかで小林美保子が誰かに必要とされたことがあっただろうか。

そう思うことが近頃多くなった。正確にいえば必要とされていると美保子自身が切に感じたことがあるのか。だが少なくともこの二二年間、つまり結婚以来答えは否である。

それでも、と美保子は過去に手をのばしてむなしく記憶の澱をまさぐる。興毅がまだ幼かった頃はと息子のことを想う。夫が帰らない幾つもの夜、静か過ぎる居間で寄る辺なく自分に身を寄せていた息子。そう、まるで母親の袋の中に入ったカンガルーの赤ちゃんのように、あるいはおぼつかない足取りで親の後をついて歩く皇帝ペンギンの子供のように。

愛くるしかった我が子の面影を掘り起こそうとするたびに、なぜか可愛い動物の子の映像ばかりが脳裏をよぎることにふと美保子は気づいた。そして例えばいろんな動物の可愛いらしい部分だけを集めて地上で最も可愛い動物を創り上げようとしても、出来上がった代物は見るもおぞましい奇怪な獣になってしまうように、天使の匂いがしたかつての興毅の印象をいくらかき集めてみても、目の前に在るのは今の興毅——日夜部屋のドアを閉ざし、いざ出てくるなり家中の器物を破壊して回る興毅なのだった。

夫はいえば……美保子の想念はもう何千回と踏んだ険しい轍へ否応なしに分け入ろうとする。男を顔で選んだのがいけなかった。それが自らの性分とはいえ遊びでとどめておくべきだった。美保子から積極的にアプローチして半ば強引に結婚、いま思えばその時すでに夫は美保子に飽きていた。家庭を築くなりみるみる冷えていった夫の態度、それにも増して冷たいままの二人のベッド、そもそもどのようなようにして興毅が産まれたのかも釈然としない。逆算してみてもその頃にはもう寝室は分かれていたのに。

仕事という名目で外泊する日も次第に多くなった。たまに帰宅した夫の様子や仕草に女の影が仄見えはじめたのと軌を一にして、昼間ひとりで家にいると最初は無言電話、受話器を取るなり女の笑い声だけが聞こえてきたり、あげくのはて夫がいる休日の午後電話が鳴

り「彼に代わって下さい」当然のように取次ぎを求められた。

さすがにその時は夫を烈しく責めた美保子だった。すると夫は素直に頭を下げ絵に描いたようにすまなそうな顔で、

「すまん……もう君では勃たないんだ」

そんなことを幾度か経るといつしか夫は、

「君も遊べばいいんだよ。俺の方は全然平気だから」

平然とした口調でいうようになった。

「さっさと別れなさいよ！ 全くもう……」

親しい友人はそう諭したが、一縷の望みである興毅のことを想うと不憫で堪らず、せめてこの子が成人するまではとなんとか踏み止まるのだった。

やがて興毅も晴れて某難関私大に入学、アメフト部に所属するとめきめき頭角を現わし関西学生選抜の強化合宿に参加するまでになった。

これで後顧の憂いなし、そろそろ離婚に踏み切ろうとした矢先、興毅が練習中に腰椎骨折の大ケガ、幸い大事には至らず肉体的にはすつかり回復したが以来人が変わったようにひねこびた性格となり、部屋に引きこもったままマンガとDVD漬けの毎日、なし崩し的に大学を中退した。あれこれ夢見た美保子の第二の人生も泡と消えてしまった。

せめてもの腹いせに不倫を、と手立てを模索してみるのが、たとえば少しばかりおどけてみせたい時「くしませう」と言ってみたり、通りすがりの地蔵に帽子とマフラーを着せた写真をフェイスブックに載せるといった、時代の荒波に晒されない場所でプライドを保つ美保子にとって出会い系サイトやホストクラブ、はたまたナンパを見越してのバー通いなどは平安王朝よりも遠い世界の出来事だった。

ならば身近なところから、趣味から生まれるめぐり逢い——美保子の特技は民謡である。幼時より山形出身の母から薫陶を受け中学生で名取になった。結婚後アマチュア全国大会の関西地区予選で準優勝した実力の持ち主だ。

たしかに隔週で通う民謡スクールやコンクール後の交流会で男から言い寄られたことも何度かあったが、彼らはみな高齢者、「体は求めない、そばにいて身の回りの世話をしてくれないか？」との口説き文句だった。

誰でもいい、若くて活き活きした男——テレビで見る若手イケメン俳優をイメージし彼に抱きすくめられる瞬間を想像してみる。一瞬ハッとするほど生々しくその感触を肩に感じる。熱い抱擁をもつとはつきり受け止めようと体の隅々にまで神経を集中させる。誰にもそつと撫でられることのない髪、もうずつと自分の指と口紅以外誰も触れたことのない唇、肩こりしか訪れることのない自分のものじやないみたいは何の意思疎通もできない躰。

みるみる肩の熱い感触は冷えてゆき、ゾツとするような悪寒に背後から抱きすくめられる。誰もいない寂しさよりもつと肌にふれる寒気——ほかの誰でもない、「孤独」が彼女をギョツと抱きしめ決して独りにさせない。

そんな美保子のなかにポツカリ開いた空洞、卑近な例えでいえばダイソンの最新型真空掃除機のような受け容れ態勢にあつては、よほどの的外れでない限り近寄ってきた男を美保子本人ですら抗いようもなく愛欲の渦に巻き込んでしまうのは想像に難くない。

『ほんとうに来るだろうか？』

この日初めて二人きりで会う男との約束の時刻、午後二時に近づいてゆくフクロウ時計の分針を見つめながら、自ら指定した古民家カフェの座布団の上で落ち着きなく腰を浮き沈みさせる美保子だった。

男と出会ったのは今日と同じ雨の日だった。夕食の食材を買いにいつもは自転車に乗って行くスーパーまで歩いて買い物を買ませ、大きく膨らんだレジ袋を両手に提げレインコートを雨に打たせたまま家路を急いでいた。

こんなにも多くの食材、そこから拵えるそれなりに手の込んだ料理のレパートリー、ほとんどは息子のため、トレーにのせ二階にある興毅の部屋の前の床に置く。ドアを二回ノックするのはご飯出来たわよの、一回は出かけてくるねの合図。週に一度顔を合わせるかどうか

だが、見るたびに肥大化していく息子の体格、蓄えられるカロリーは何のため？　そう思うと両手の荷物がますますずっしりと美保子の貧弱な上半身を責め苛んでくる。

うつむいて歩く美保子の視界に薄青い影が映った。顔を上げると男と目が合った。今夜の夢に出てきそうな強烈な印象を残す顔。男はまるで旧知の仲のように笑顔で片手を上げ、チヨロチヨロした足取りで近づいてくる。なんの遊び心もない、強いて推し量るならこの天気に合わせてたかのような水色のTシャツに水色の短パン。ちょうど小六時の興毅と同じほどの体格、どこかのゴミ捨て場で捨てきたような軸の錆びたやや黄ばんだビニール傘を美保子の頭上に差しかけようと選手宣誓みたいにピンと垂直に腕を立て――

その時カフェのドアノブに掛けたカウベルが鳴り、ドアを押して男が入ってきた。さつき店主が厨房に入ったときり店内には美保子以外誰もいなかった。

「こんにちは」

元気にいうと男はあたりをキョロキョロ見回している。奥に引っ込んだ二人用の席にいる美保子にはまだ気づいていない。急に降り出した雨に濡れた坊主頭をハンドタオルで拭きながら、入口付近に置かれた鮭を持つヒグマの巨大な木彫りを珍しげに眺めている。美保子は振り返って顔をのぞかせた。

この前と同じようにその男藤田新は親しげに左手を上げて笑った。あの時と同じ顔じゅうの筋肉が引き千切れんばかりの、顔全体を最大限に活用した、まるでそれ以外のすべての感情を押えつけようとするような強い笑い。だが改めて見直すと下らない冗談を聞いた時にする呆けた笑顔だった。

新が席につくと通り一遍の会話の途中不意に美保子は、

「ねえ、頼みたいことがあるのよ」

すぐに新は深くうなずき「いいですよ」といった。まるであらかじめ決められたセリフを今やつと聞いたかのように。その目がいつそう嬉々として輝くと、

「そのために僕はここへ来たのですから」

その言葉に聞き覚えがあった。あの時も全く同じことを言った。

使い古しのビニール傘を美保子の頭上に差しかけながら、

「持ちましょう」

美保子の手からレジ袋を受け取ろうとした。

反射的に袋の取っ手を握る指にギュッと力をこめた美保子は驚きのあまり、

「なぜ？」

ほとんど声にならなかった。

新は心から不思議そうな顔をした。

「なぜって、そのために僕はここへ来たんですから」

その時そう言ったのだ。

今カフェの片隅で年輪の浮き出た木製の仕切りに囲まれ個室のようになった一角で、美保子は改めて男の顔をじっくり検分した。

絶えずビククリしつづけているような強い目の光は今細まって柔和にぼかされている。汚れた言葉を吐くことなど想像できないそこだけ少女のように愛らしい唇、ヨーロッパ中世の悪魔のように尖った大きな耳朶、それらが福笑いのようにお互いのバランスを無視したまま肥満し荒れた肌の上で嫌々同居しているみたいだ。

その奥にどんな心情が湛えられているのか、いったいどんな風にして生きてきたのか、家族は？　友人は？――そういった諸々の謎に美保子の興味は一切惹かれなかった。さつきから彼女の目は新の顔の中の一点――すりこぎを埋め込んだかのように太く長い鼻柱に集中していた。彼女自身全く意識していないが、よく知られたあの噂――鼻梁と陰茎とは大きさに於いて正比例するという、何の科学的根拠もないのに暗に信じる人もいるあの俗説に影響されているのか。

その証拠にかあらずか、さつきから美保子はどう切り出していいかわからず、傍に置いたバッグのフタを意味もなく開け閉めしている。大きめのケリーバッグには替えの下着一式

と念のため避妊具が用意してある。

うまく切り出せないのは店の照明が明る過ぎるからと環境のせいにした。本当は薄暗いバーにしたかったのだが、この時間開いている店が見当たらなかったのだ。メニューを開いてみる。ドリンク欄の末尾にひっそりアルコールとしてビールとグラスワインのみ記されている。

美保子は赤ワインを注文した。新にもすすめたが、アルコール類は一切口にしないのとどこだった。

美保子自身は東北の血も手伝い、かつて民謡スクールの仲間内では酒豪で鳴らし、息子が引きこもりはじめた頃キッチンドランカーの悪癖に染まった時期もあった。だが持ち前の自制心で立て直し、かえって今ではスクール後に行くカラオケ以外で飲酒することは絶えてなかった。

だから小さなグラスに半分しかない一杯目を飲み終えた時早くも酔いが回りはじめた。赤・白・赤・白と交互に注文し何往復したかわからない頃、美保子の目に新の顔は雨後の月のようにぼんやり紗がかかって美しく映え出した。

その一方で舌のほうはいっしか寄生した別の生命体のごとく活発に回りつづけていた。普段の美保子なら決して口にできない、けれど口にしたくて堪らなかった言葉を新に向けて次々口走っていた。

「いつもどうやって処理してるの？」

「ねえ舐めてもらったことある？」

「好きなことしてもいいのよ」

「ホテルですか？ それとも部屋に行ったほうがいい？」

その一つ一つに新は丁寧な答えたが、自分の内なる声に傾けている美保子の耳は聞いていないか、聞いてもすぐに忘れてしまった。最後の二者択一に対して新の答えはどちらともつかず、しばらくたって、

「残念ながらそろそろお別れの時間です。どうしても会わねばならない人がいるのです」
ボイスレコーダーを再生したかのように新の声が届かないほど遠くから響いた。

フラフラと美保子は立ち上がり、新の隣にボタンと尻を落とす。後ろで束ねていた髪をほどき、肩の上に垂らした。年齢には若すぎる白い襟の付いたピンクのブラウスのボタンを二つ外した。

手を伸ばすと太腿にふれ、男がまだそこにいることを確かめると美保子の中で堰を切つて熱い何かがドッと溢れ出した。男の首に両腕を回し、グッと顔を近づけると唇を合わせた。男は抵抗せず、さりとて美保子の手を軽く握っただけで自分からは何もしてこなかった。

美保子の舌が新の舌を求めて口腔内をうねっていると、外の仕切り板を叩く音がした。いかにも上品などちらも綺麗な銀髪の店主夫妻が立っていた。

「お客様、失礼ですがさっさとホテルへ行っていただけですか？」

いったい人はそのはかない生のうちに何を求め、何を見つけて去っていけばいいのだろうか？

そんな語り尽くせぬ問いに対し、伊藤由依の答えは実に単純明快で迷うところがなかった。すなわち豪華な食事、年代物のワイン、海外一流ブランドの洋服や小物、都心の庭付き一戸建て、休日にはヨーロッパ車で遠出、将来的には自家用クルーザーで世界一周。つまりは豊かな富が約束するものすべてだった。

そう信じて疑わないのは自分の生い立ちに端を発するのかもしれない、とつかのま省みたことすら一度として彼女にはなかった。若くして亡くなった母、その後すぐ再婚した財産家の父とは絶えて音信不通のままである。

入院中の父と知り合った当時看護師をしていた美しく優しい母、うわべは親切だがどこか冷淡さを隠せなかった継母、少女だったあの頃抱いたはずの葛藤も今の由依からはすっ

ぼり抜け落ちてはいる。

それでも由依は、鏡の前に立つ時だけ実の母の面影が頭をよぎりそつと微笑む。だがそれは「美しく優しかった」母のうち「美しい」面だけであり、その生き写しを自分の顔のなかに見た満足の笑みでしかなかった。

たしかに一目見ただけで男たちを魅きつける容貌である。十代のような愛らしさの中に時折実年齢以上の妖艶さが火花を散らし、永久脱毛した肌は滑らかに輝いている。現在三十一歳だが二十九とサバを読んでいる。それでも、

「ウソだろ！ 二十二、三にしか見えない！」と男たちはもてはやす。

クラブやバーでナンパされるのはもちろん、コンビニや電車内、牛井屋で牛丼を食べている最中声を掛けられたこともある。タレント事務所にスカウトされたことも度々だ。

ところがよく見るとその顔には何か欠け、反対に何かが過剰だった。唇は小さいが貪欲そうに厚いし、頬に薄く入った線は貧しい印象を与えた。濃いブルーのアイラインは強い目を放つが、どこか輝きが失せている。

それに服の上からは見事なスタイルだが、実のところ贅沢な飲食がたたつて下腹と脇腹に肉が乗りすぎていた。

十八歳で家を出てから数々の美しく有能な男たちと恋愛関係を持ち、男の部屋に転がり込んでヤドカリ生活を連ねた由依だったが、それぞれの交際期間は短命だった。最大の原因が由依の浪費癖にあるのはいうまでもない。

そのため様々な職を経験してきてもいた。ショップ店員、フレンチレストランのフロアを皮切りに接客業ばかりだったのが、容易に想像されるとおり短時間で高収入の仕事を始めガールズバー、キャバクラ、ラウンジなどへ苦もなく流れていった。

今は久しぶりに水商売以外の分野にもどつていた。人気有名作家の画風に酷似した二束三文の絵を高価な額縁に入れて売る、さる画廊の街頭でのキャッチセールスである。現在付き合っている男、多角的に詐欺まがいの店舗を経営する妻子ある四十代の男に懇願されやむなく引き受けたのだ。基本給は低く出来高払いのため低収入だが、男に飲食費のほかマンションも用立ててもらっているから文句は言えない。だが最近妻にメールが発覚し、男の方から別れ話めいた文句をちらつかせはじめ、由依自身そろそろ潮時かなと考えていた。

手首に巻いたコーチの腕時計に目を走らせる。五時を少し回っていた。そろそろ出勤の時刻だ。最後の仕上げに手鏡をのぞき込み、唇を突き出したつぷりグロスを塗り付ける。上下の唇は何かを飲み込むピンク色の内臓みたいに内側に巻き込まれていく。すぐに弾かれたようにブルツと元に戻るはずが、唇は縫いつけたように合わさったままブルブル震えはじめた。急にへの字型に開くと甲高い笑い声はほとばしった。声は押し殺した笑いに変わりいつまでも止まない。

目尻に浮かんだ涙をあわててティッシュで拭くと、笑いの素、先週出会った男を仔細に思い描いた。また笑いが噴きこぼれそうになった。

先週の何曜日だったか帰宅時のラッシュタイム、由依が駅前でキャッチに励んでいた時のことだ。その日も定石どおり見映えのいい男、きちんとスーツを着こなした見識のありそうな立派な紳士たちには目もくれず、見るからにうだつの上がらない、女には一生縁のなさそうな、そのくせ身の程も知らず未来の彼女のために小金を貯め込んでいそうな男ばかりを狙っていた。

そんな男たちは由依が声を掛けると途端に目を輝かせ、

「いきなりでごめんなさい、直感でよさそうな人だなあって……少しお話してもいいですか？」

優しいな由依の言葉に運命の出会いを確信し、かつて誰も気づかなかったダイヤの原石のごとき己の豊かな内面をつまびらかにしようと急に堂々と胸を張った。

だがひと通りの世間話の合間、由依が吐きそうになりながらささやいたお世辞のあと、クリアファイルからチラシを一枚抜き取り渡してみせるやみるみる男たちの表情は曇り、悲しげにうつむいて足早に去ったり、激昂してチラシを破り棄てるのが常だった。

あの日も似たようなケースが何度かあり、もう一人ダメなら引き返そうと煮え返る腸を抑えながら立っていた時のことだ。

一人の男がニコニコ笑って「やあ」と手を上げながら——誰に向かつて？——思わず振り向いたが誰もいない、他でもない由依に向かつて近づいてきた。

由依はとっさに身をよじり、他の誰かを探すふりをした。

信じられないことに男はわざわざ回り込んで由依と至近距離で向き合う形になり、「一枚もえませんか？」

といった。

由依は呆気にとられた。練達の笑顔はすっかり消え失せていた。恐る恐る男の顔を見下ろす。

年齢、性別、国籍とも不詳、由依にとってはヒト科に属するかどうかも怪しげな男。はるか前時代にもどって買って来たような粗末な服、食用に太らせたヒキガエルのように醜く矮小な躰、ホラー映画か悪夢の中で会ったことのある顔。

由依は言葉をも失い、反射的にクリアファイルを顔の前で振り拒絶のしぐさをみせた。それなのに男は、

「僕は何をすればいいのですか？」

といった。

しかたなく由依はいつもとはちがう硬い笑顔を被り、口早におざなりのご案内をした。男の鮮魚のような目に奇妙な、理知的とは言い難い光が瞬くと、恥じ入るように頭を落しうなずいた。

「それが君にとって本当に欲しいものを得る糧になるなら、僕は迷わず投資するよ」

とかなんとかよくある歌詞みたいなことを口走っていた。

ではこちらになります、由依が先に立って歩き出そうとすると、

「悪いけど今日は人と会う約束です。この日この時にきっと行きます」

ポケットから出したペンでチラシの端に日時を書くと、そこだけ千切って由依に渡した。それが今日の午後六時である。

由依は部屋の戸締りをし、テーブルの上からカギを取ると電気を消した。暗がりにあの男の容姿がぼっかり浮かんだ。

ふと何か忘れていている気がしてそれを思い出そうとした。一分間じつと頭をめぐらせ、それがこの前社長にせがんで断られたクロエのバッグだとわかった。ちがう気もしたが、そうにちがいないと信じた。欲しかったケリーバッグの値段と売り物の絵画の価格、それによる自らの歩合をすばやく見積もった。少なくとも限定部数入りのあの版画を買わせなければ。

みるみる男の幻影は顔かたちを変え、まるでシニールな絵画のように首の上に赤い三角形のバッグが載った。

午後六時、いつもの駅前にもどった新はロータリーとは線路を挟んだ反対側、小さな西口改札を出て徒歩三分の場所に立つ、さる雑居ビル二階の一室にいた。

安っぽい光沢を放つ合成樹脂の真新しい机の前に新は座っている。向かいには伊藤由依が座り、机の上に置いたカタログを指し示しつつにこやかに何か喋っている。喋りながらしきりに小首をかしげ、オレンジの混じった明るい茶色の髪がそのたびに揺れた。グレーのスイツの下の白いシャツは第二ボタンまで外しているため、豊かな胸の谷間を強調した形だ。

新は目の前のコーヒーが入った紙コップを脇にどかせ、前のめりになってカタログをのぞき込み感心したようにしきりにうなずきながら耳を傾けている。カタログには極彩色で描かれた野鳥が飛び交い様々な動物が群れ集う幻想的な大自然、高層ビルの上空にバスや飛行船が浮かぶ未来都市を描いた絵画がいくつも掲載されている。

やがて由依は立ち上がり、どうぞと新を促し壁の方に近づいていった。白い壁の上にはカタログで見た絵画の一部が額縁に嵌って広い間隔をおいて並んでいる。そのうちのいくつかには絵の下に付いた小さなプレートの上に「売約済」と書いた紙片が貼られている。

一つの絵の前で足を止めた新を見て、由依の顔にサツと何かの表情が浮かびすぐに消えた。クレーターまではつきり見て取れる巨大な月を、山小屋のそばに立つ少年の後ろ姿が見上げている絵。どこかで見たことのある、しかしどこか印象の薄いその絵を、描かれた少年と同じ姿勢で新も見上げている。

新がしゃがんで絵の下のプレートのをぞき込むと、由依もそばに来ていっしょにのぞき込んだ。ほとんど頬と頬が触れ合う距離だ。プレートには題名と作者名、金額が記されている。

新は人差し指をのぼし金額の0の数を一つずつ数えた。由依は唇を寄せ何かささやかながら励ますように新の肩に両手を置いて軽く揺すった。新はぬいぐるみのように微動だにせず揺すられるがまだ。

しばらくして二人は席にもどり、さっきより艶やかさを増したように見える由依がしきりに話しつつづけている。新はポケットからタオルを出し、額の汗を拭っている。その背中が少しづつ前屈みに萎んでいく。

新の口が開き何か短い言葉を発した。由依の顔がゾツとするほど醜く歪んだが、次の瞬間魔法のようにその同じ表情が溶けそうに潤んだ哀切きわまりない表情に昇華していた。

机の上に置かれた新の拳を由依の掌がそっと包んだ。新がゆっくりうなずくと由依はサツと手を離して作り付けの笑顔にもどり、席を立った。

すぐに帰ってきた由依は若い男を背後に伴っていた。顔も体つきもゴツゴツした骨格の、およそ絵画に造形が深いとは思えぬ大男だ。

由依は座ると手にした小さな帳面を机に置いた。表紙に「納品書兼請求書」と書いてある。頁を開くとペンで書き込み、一枚下の紙を切り取って新の前へ滑らせた。新は両手で紙を支え、うつろな目でぼんやり見つめた。

およそ五十分後、駅前に一つしかない大手都市銀のATMコーナーの片隅で、片手をズボンのポケットにもう片手でスマホを操作しつつ、苛立たしげに右往左往している大男の姿が見られた。目の前にあるカードローン専用ブースの扉が開くと男の足がピタツと止まった。中から幾分やつれた様子で出てきた新はやや厚みのある緑色の封筒を男に渡した。

午後十一時、新の部屋で固いものどうしがぶつかる大きな音がした。ハツと机から顔を上げた新はついていた肘をまっすぐ伸ばし、イスに深く座り直した。ついウトウトしてさっきから何度も机に顔をぶつけているのだ。

眠気覚ましにコーヒーを飲むことにした。湯を沸かし、インスタントコーヒーのフタを開けたが底に数粒しか残っていなかった。

コンビニで小さいビンを買うことにしよう。そう思うと、大好きなコンビニの紙コップのコーヒーが飲みたくなつた。だが今日の出費のことを省み、どちらも我慢することにした。出来たコーヒーは一見ハーブティーにみえる薄い色だった。

イスにもどった新は目を擦りつつ開いて置いてあるノートに再び見入った。今日の具体的な戦績とその感想、反省点などが稚拙な文字で鉛筆書きされている。ところどころ文字の一面から放射状に直線や波線が伸びているのは寝入ってしまった瞬間の筆の勢いだった。新はそれを消しゴムでいねいに消し、いっしょに消えてしまった文字をなぞって書き直した。

「今日はさすがにちよつと疲れたよ」

それは開け放したフスマの向こうの暗闇にいるハムスターたちに言ったはずだ。いつもならこの時刻、せわしなく動き回る音が寝室を満たしているのに、今日は静まり返っている。帰ってきてすぐにやった餌をまた無計画に完食してしまい、すっかり満腹で全員眠りこけてしまったのかもしれない。

それでも新にはまるで返答するかのような彼らの微かな足音がきこえたみたいにな、

「また明日一日がんばってみるよ。自分で決めたことだから……」
ノートを手にとり、あらためて今日の頁を見返しながらいった。

もちろん誰も答えなかった。もし聞いているとすれば新の座るイスの脚、木目調の合成樹脂の上に止まる一匹のまだ幼いゴキブリだけだった。保護色と見紛うほどイスの材質と同じきれいな薄茶色だった。

ノートから目を離れた新は腕を組み、その腕の中に顔を埋めるようにがつくり肩を落とした。まさしくゴキブリの目線に近づこうとする恰好にみえた。

「少しずつだけど万事正しい方向へ向かってるはずなんだが……どう思う？」

「本当にゴキブリに向けて言っているのか、それとも自分の足に向けて言っているのか。微かに触角を震わせたものの、もちろんゴキブリは何も答えなかった。」